晴海まどか
パラドックス

パラドックス

　彼女はとても美しかった。気立てもよくて、明るくて、まさに完璧な女性だった。
　僕は長年付き合ってきた恋人に別れを告げ、彼女に愛を告白した。そんな僕に、彼女は申し訳なさそうに言った。
「気持ちはとても嬉しいわ。わたしもあなたのことがとても好きだもの。ただ、一つだけあなたに隠していたことがあるの」
「何だい？」
「わたし、あなたに出会った一ヶ月前よりも昔の記憶がないの」
　そんなことは何の問題でもなかった。僕は彼女にその場で結婚の申し込みをした。

　結婚式の準備は着々と進んでいた。そして、結婚式まであと少しというところで。
　彼女に異変が起きた。
　美しい彼女の顔が青ざめていた。そしてその両手、両脚が、ガラスのように透けていた。
「一体どういうことなんだ？」
　とりあえず、彼女を病院に連れて行くことにした、まさにそのとき。
　見慣れない青い制服を着た男二人が、ぱっと僕らの前に現れた。
「わたしたちは、時間警察です。実は、彼女は未来から事故によってこちらの世界に飛ばされてしまった、未来人なのです。申し訳ないが、彼女をこちらに引き渡していただきたい」
　僕は彼女の腕を掴んだまま動けなかった。
「そんな話、信じられるか！」
　男たちは顔を見合わせ、小さくため息を吐いた。
「何とも言いにくいのですが……実は、彼女はあなたの娘なのです」
「何ですって？」
「彼女とあなたが結ばれることは、絶対にありえない。そんなことが起こったら、彼女の存在自体が消滅してしまう。だから、現に彼女の体は透け始めているのです。このままだと、彼女は消えてしまいます」
　彼女がわっと泣き出した。僕も泣きたかった。
「そんなことが……」
「お気持ちはお察しします。しかし、未来は変えられないのです。そこを何とかーー」
　男が言葉を切った。それと同時に、僕は脇腹にドンっという衝撃と、熱い金属を押し当てられたような痛みを感じて膝を折った。彼女が悲鳴を上げた。
　僕の足元に、じわじわと血の海が広がる。
「あんたが悪いのよ」
　僕が捨てた恋人だった。彼女は血の滴る包丁を構え、充血した目で僕を睨んでいた。
「こんなことしたら未来が……」
　血が止まらない。徐々に意識が朦朧としてくる。

霞む視界。彼女の姿が煙のように掻き消えたのを見て、僕は自分の運命を悟った。